

地域在住高齢者の「生きがい」と「尊厳ある死」、そのケアについて

平成 18 年度入学

参加したフィールドスクール：エチオピア

調査国：エチオピア

笠原順子

キーワード：高齢者，ケア

自身の研究テーマについて

本邦では 2050 年、65 歳以上の高齢者が全人口の 3 割を超えることが見込まれている。今後、アジア／アフリカにおいても順次高齢化が予測されている。ではそもそも高齢者とはどのような存在であるか。例えば、本邦では 65 歳以上を高齢者と呼ぶが、WHO の分類によれば、高齢者は 60 歳以上である。また、同じ 65 歳という生物学的年齢でも、山登りに行くような方もあれば、寝たきりになった方もある。このような老いの多様の中で、ある社会において高齢者とはどのように定義されているか。彼らは、どんな場所で、誰と暮らし、何を食べ、何を生きがいとして暮らしているか。ケアは誰がどのように行っているか。まずは、ある社会における老いを生きる人間の生態（身体機能、認知機能、精神状態）を観察し、彼らへのケアの様態を探る必要がある。

たとえばセネガルでは、片麻痺を持った寝たきり女性の看取りの場面に遭遇したが、彼女の背中には床ずれがなかった。これはマンパワーによるのか、ケアに関する在来知によるのか。伝統医療や呪術の存在によるのか。病院を中心とする急性期医療では、高度な医療技術や医療機器、膨大なコストを必要とするが、高齢者のケアには、マンパワーと時間、人間同士の温かい触れ合いが必要で、ケアについては日本や西洋社会よりも東南アジア／アフリカにおいて潤沢な潜在力があるのかもしれないと考えている。



75 歳女性@アダマ

フィールドスクールから得られた知見について

アジスアベバ大学で受けた Meseret Bihonegn 氏のエチオピアの高齢者政策に関する講義は、保健省の政策内容がコンパクトにまとめられていて有意義であった。実際に調べた訳ではないので単純には言えないが、彼女が提示したデータからは、政策への意見は健全であるように私には思えた。老人ホームは足りていない、年金をもらえるのは元公務員だけで十分ではない、在宅ケアが手薄である。これらは日

本でも同様の意見を耳にすることがあるが、**高齢化率**の高低を問わず、高齢者政策に関する NGO の意見が日本とエチオピアで似ているのは興味深かった。また、人間の生態を知るためには、その国の地理、歴史、気候風土、食文化、経済状態など、文化に関する多面的な知見が必要であるが、フィールドスクールにおける座学のみならず、郊外への移動の間に車窓から見る風景、休憩地点で目にする人々の食べ物、飲み物、見学に行った先の農家の畑や彼らのもてなし、聾学校での授業風景、手工芸家での機織の様子、とにかく行く先々で、エチオピアの人々の暮らしぶりを眼のあたりに行うことができ、エチオピア入門として多くを観察することができたように思う。

また、大学院生のジョイントプログラムにもケアを主題とする

セミナーがあり、これは自身の研究テーマに最も適ったもので面白かった。アジア/アフリカ両方のケアについて日本人の知見を得られる機会はそう多くない。



インジェラ@メルカサ農業試験場

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

長期フィールドワークに出る時取る姿勢。①文献だけは読んで行く。②その土地をよく知った日本人から外国人の視点での話を聞く。③ネイティブからネイティブの視点での話を聞く。そして、今回のようなフィールドスクールの形態。私にとってのフィールドスクールの印象は、①～③までの全てを網羅したユニークな学校。あらゆる段階にある参加者が、対象国の文化を共有しながら、参加者同士を相互観察しつつ、意見交換しつつ、自身のテーマについて多様な意見を得られる好機。「ごった煮」集団から新たな着想が生まれるイメージ。たとえば今回、アルバミンチから一日見学で訪れた手工芸の町、チェンチャ。高齢者だけに着目すれば見落とすかもしれない生業（リンゴ園や機織の仔細）、家の形態、衣服についてなど、同行のメンバーから高齢者の暮らしを知るための様々な視点をもらった。老いとして身体にあらわれる生物学的な現象と高齢者の生活実践を把握する研究は、学際的な視野とともに厚くなるだろうと予感した。



織物を売る@チェンチャ



糸を紡ぐ@チェンチャ